

## 光永圓道師

## 比叡山延暦寺一山大乗院住職、北嶺大行満大阿闍梨

(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』から抜粋して転載・編集しました。編集責任：前田栄三)

千日回峰行とは、滋賀県と京都府にまたがる比叡山山内で行われる、天台宗の回峰行の一つ。

満行者は「北嶺大先達大行満大阿闍梨」と呼ばれる。

「千日」と言われているが、実際に歩くのは「975日」である。

「悟りを得るためではなく、悟りに近づくためにやらせてもらっている」ことを理解するための行である。

**【千日回峰行の概要】**

7年間に亘って行う。1～3年目は年に100日、4～5年目は年に200日行う。

無動寺で勤行のあと、深夜2時に出発。真言を唱えながら東塔、西塔、横川、日吉大社と260箇所を礼拝しながら、約30kmを平均6時間で巡拝する。

途中で行を続けられなくなったときは自害する。そのための「死出紐」と、短剣、埋葬料10万円を常時携行する。未開の蓮華の葉をかたどった笠をかぶり、白装束、草鞋履きで行う。

右の写真は、千日回峰行の祖、相応和尚像（無動寺）

**【堂入り】** 無動寺明王堂

5年700日を満行すると、最も過酷とされる「堂入り」が行われる。

入堂前には行者は生き葬式を行い、無動寺明王堂で足かけ9日間(丸7日半ほど)にわたる断食・断水・断眠・断臥の4無行に入る。堂入り中は明王堂には五色の幔幕が張られ、行者は不動明王の真言を唱え続ける。

毎晩、深夜2時には堂を出て、近くの閻伽井で閻伽水を汲み、堂内の不動明王に供えなければならない。

水を汲みに出る以外は、堂中で10万回真言を唱え続ける。

堂入りを満了(堂さがり)すると、行者は生身の不動明王ともいわれる阿闍梨となり、信者達の合掌で迎えられる。これを機に行者は自分のための自利行から、衆生救済の利他行に入る。

6年目にはこれまでの行程に京都の赤山禅院への往復が加わり、1日約60kmの行程を100日続ける。

7年目には200日行い、はじめの100日は全行程84kmにおよぶ京都大回りで、後半100日は比叡山中30kmの行程に戻る。

**【満行後】**

満行者で、無動寺谷明王堂の輪番職にある者は、その後2～3年以内に100日間の五穀断ち(米・麦・粟・豆・稗の五穀と塩・果物・海草類の摂取が禁じられる)の後、自ら発願して7日間の断食・断水で十万枚大護摩供(別名：火炙り地獄)を行う。

満行者は京都御所に土足参内し、加持祈禱を行う。京都御所内は土足厳禁であるが、満行者のみ許される。回峰行を創始した相応和尚が草鞋履きで参内したところ文徳天皇の女御の病気が快癒したからであるとも、清和天皇の後の病気平癒祈禱で草履履きのまま参内したからだともいわれている。

回峰行初百日を終えた後に立候補し、先達会議で認められた者が行に入る。

**【沿革】**

平安時代に相応和尚が始めたとされる。この行を2回終えた者(二千日回峰行者)が3人おり、その中には酒井雄哉師が含まれる。3回終えた人、三千日回峰行者が1名いる。1934年、奥野玄順師である。

**延暦寺**は、滋賀県大津市坂本本町にあり、標高 848m の比叡山全域を境内とする寺院。

比叡山、または叡山と呼ばれることが多い。平安京（京都）の北にあったので南都の興福寺と対に北嶺（ほくれい）とも称された。平安時代初期の僧・最澄（767年 - 822年）により開かれた日本天台宗の本山寺院である。住職（貫主）は天台座主と呼ばれ、末寺を統括する。

1994年には、古都京都の文化財の一部として、（1200年の歴史と伝統が世界に高い評価を受け）ユネスコ世界文化遺産にも登録された。

**無動寺**は、滋賀県大津市にある比叡山延暦寺東塔無動寺谷にある塔頭で、千日回峰行の拠点である。無動寺谷には明王堂・建立道場・大乘院・法曼院・弁天堂などがある。東塔の一谷ではあるが別格で「南山」と呼ばれている。右の写真は、無動寺明王堂。



**大行満**（だいぎょうまん）とは、密教・修験道において、千日回峰行を満行した者に与えられる称号。

**阿闍梨**とは、サンスクリットで「軌範」を意味し、漢語では師範・軌師範・正行とも表記するが、その意味は本来、正しく諸戒律を守り、弟子たちの規範となり、法を教授する師匠や僧侶のことである。千日間を満行した者は、北嶺**大行満大阿闍梨**と呼ばれる。

**真言**（しんごん）とは、サンスクリット語のマントラ の訳語で、「（仏の）真実の言葉、秘密の言葉」という意。『大日経』などの密教経典に由来し、浄土真宗を除く多くの大乘仏教の宗派で用いられる呪術的な語句である。

以上

【ご参考】比叡山延暦寺ホームページ“比叡山の修行”から、千日回峰行以外の修行を転載・編集します。

## 十二年籠山行

籠山（ろうざん）行は伝教大師の時代より始まりますが、現在のように大師の御廟である浄土院で生身の大師に仕えて奉仕する“侍真（じしん）”の職を勤めるようになったのは、元禄年間からです。

現行の籠山行に入るためには、まず好相（こうそう）行という礼拝行を行なわなければなりません。この行は、仏が現れるなどの好相を感得するまで続けられ、その後戒壇院にて戒を受けます。ここで初めて籠山比丘となり、12年間の山修山学に入ります。

籠山僧は、伝教大師に食事を献ずるなどの日課のほか、坐禅や勉強、境内や道場内の清掃に明け暮れ、うつろい激しい世間の流れから離れて、一日一日を生きるのです。

## 四種三昧

四種三昧（ししゅざんまい）は、比叡山で最も歴史の古い、基本的な修行です。中国の天台大師による『摩訶止観（まかしかん）』に基づく修行で、常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧の四種です。

常坐三昧は、静寂な堂内に一人で入堂し、坐禅に没頭します。2度の食事と用便以外はもっぱら坐り続けます。

常行三昧は、念仏をとえながら、本尊阿弥陀仏の周囲をまわり続けます。堂内の柱間にしつらえた横木を頼りに歩いたり、天井からつり下げられた麻紐につかまって歩を休めることはできますが、決して坐臥しません。

半行半坐三昧には、方等三昧と法華三昧があり、比叡山では法華三昧が行なわれています。五体投地や法華経の読誦からなり、歩いたり坐ったりしながら行をすることからこの名があります。

非行非坐三昧は、毎日の生活そのものが修行となります。期間や行法が定まっていないので、かたちを超えた本質に通じなければならず、必ずしも容易とはいえません。